

平成25年10月31日

第51号

■発行■



総合病院 社会保険
徳山中央病院
周南市孝田町1-1
☎(0834)28-4411

徳山中央病院だより

副院長に就任して

副院長 那須 誉人



【はじめに】

平成25年4月に総合病院社会保険徳山中央病院副院長を仰せつかりました。私が赴任してから今まで30年間、徳山中央病院は全国社会保険協会連合会（全社連）の傘下でありましたが、本院は平成26年4月より独立行政法人 地域医療機能推進機構（JCHO）へ移行します。これまでも全社連の動きは色々耳にはしていましたが、詳細はそれほど真剣に聞いていなかったのが正直なところです。そのため、副院長就任後種々の書類に接し、移行の重要性を理解すると同時に、将来に対する漠然とした不安も感じました。職員の皆様も色々な噂、新聞での全社連の報道に接してご心配されていることと思います。

全社連の運用規程で経営されてきた本院の今後は、簡単に言えば、

病院の土地、建物は国有財産のままで、独立行政法人 地域医療機能推進機構（JCHO）の給与規程、就業規則にのっとり運用されることとなります。若干の違い（特定独立行政法人、一般独立行政法人）はありますが、基本的には専門医療センター、岩国医療センターなどの「国立病院機構」の運用状態を想像していただければよいと思います。現在はその移行への準備段階です。

【時代の流れ】

新体制（JCHO）では従来のやり方とは少し異なった所がでてきます。これまでの全社連傘下の病院としてのやり方について、一概にその善し悪しの判断を下すことはできません。一般的にいろいろな組織も色々問題、矛盾等を抱えているものです。ただ、今回は「国」の方針としての変更であり、時代の巡り合せですので、この時代の中で生きていく必要があります。

振り返れば、全社連の病院として徳山中央病院が歩んできた道も決して平坦な道ではありませんでした。私が赴任した時期は坂本院

長の時代で、病院の先輩の諸先生方から苦しかった時代の話を伺う機会がありました。坂本院長の赴任時には、赤字による給料の支払いの遅延等があったため見切りをつけて退職していった職員がいらしたと、薬剤費の支払ができず、銀行からも融資が受けられなかった時期もあったと云うことでした。ただ、残った先輩職員一同の皆様の努力で病院は立て直され、その後はご存知のとおりです。また、「病院志向」といった時代の流れで成長をとげた時もありました。

私が30年前に当院に赴任した時の最大の驚きは、職員個人への配布書類が一度使用した封筒を裏返し再利用されていたことです。また、診察机は単なる事務机でしたし、備品には手作りのものもあり、それを不要となった部署から他の部署へと使い回していた光景も目にしました。恐らく病院が財政面で苦労していた時からの伝統だったのでしょう。

そのようなところに職員の方々の勤勉さ、そして、病院に対するプライドを感じ、医師として非常に働き易い、また働き甲斐のある病院だと感じました。今後従来の慣例その他は変化します。新しい運用形態に戸惑い、不満を感じることもあると思います。しかしながら、それはある意味時代の流れであり、逆らうことはできません。

病院の理念及び基本方針

1. 人間としての尊厳を守り、敬愛の心を持って全人的医療を行う。
2. 臨床研究・医学教育に努め、医学の発展・普及に貢献する。
3. 関連機関と連携し、地域の健康と福祉の増進に努める。

では時代の流れの変化のなかで生き続け、発展するためには、一体なにが必要なのでしょう？

それは、今までの当院の歴史が示すように、病院としての使命をひたすら真面目に継続し続けることです。病院とは、国民のため、地域住民のために安全で質の高い医療を提供する場所であると同時に、10年後、20年後、われわれ自身や家族が病に倒れた時に頼る事の出来る所でもあります。また、われわれ自身とその家族のために、生活の糧を得る所でもあります。

【発想の転換】

当院に限らず、全社連傘下の病院は、昨年から様々な報道され、種々の指摘を受けました。新機構では従来と同じボーナスの支給、病院の補助による海外への職員旅行等は困難となります。

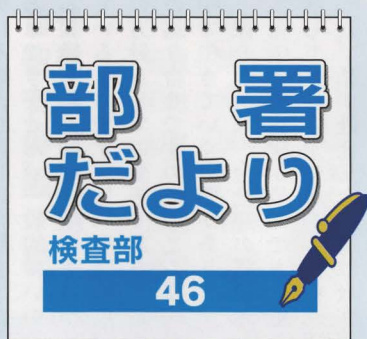
また、職員一同の抱える問題は子育て、親の介護、マイホームの準備、子供の教育等多種多様です。今後は勤務形態の多様性を認めそれに合った働き方(ワーク・ライフ・バランス)が求められます。特に女性が勤務しやすい環境の整備(病児保育、夜間保育、産休後の復職支援システム等)も必要です。一般にどんな組織でも、黒字が続き運営が順調な時は、問題が内蔵されていると解つていても業務改善は困難です。ですが、発想を転換すれば、新機構への移行は「黒

船来航」と捉えることができます。つまり、今こそ従来の慣例を見直し、より良く、そして大胆な業務改善を行う絶好の機会とも考えることができます。先に述べたような問題に対処しうるようなシステムは一朝一夕にできるものではありませんが、いかなる体制下であれ、これを目標とし、働きやすく、かつ医療に従事する者として働きたいのある病院を整備することは可能なのではないのでしょうか。

【徳山中央病院の使命】

RFO本部との話し合いの中でも、徳山中央病院に求められているのは、急性期病院として、救命救急センターとして「地域医療を担い、質の高い医療を提供すること」であり、従来われわれが目指していたことと大きな違いはありませんでした。

私はどのような時代が来ても医療に従事する者としてその本分を忘れず、諦めずに日々の診療を真摯に行う努力を継続すれば、新しい道は必ず開けると確信します。ここ山口県に住むものとして、そして、社会保険病院の中では山口県に徳中ありと言われ、長きにわたって周南地区の二次医療圏の中核病院として地域医療を支えてきた「誇り」を持つものとして、その誇りを忘れずに、新体制でも皆様と一緒に頑張っていきたいと祈念しております。



検査部には、山下吉美部長のもと37名の臨床検査技師と医療技術補助員1名が在籍しています。意外に人数が多いと思われるかもしれませんが、いくつかの分野に分かれており、少ない所は2名で検査をしている部署もあります。臨床検査技師は国家資格で、養成学校ではもちろん全

ての領域を勉強して卒業するのですが、やはり実践の場での技術取得無しでは技師として成り立ちません。当院の様な施設の場合、就職後配属された所により専門に分かれる為、検査なら誰でも何でもできる訳ではなく、その代りそれぞれの分野においてレベルの高い認定技師が活躍しています。

検査は大きく検体検査と生体検査に分かれます。当院では西館2階に検体検査(病理・微生物・一般検査・血液検査・生

学免疫検査・輸血検査)1階に生体検査(心肺機能検査・エコー検査)が配置されています。検査は様々な装置、機器を使用し行われます。検査部全体では大小合わせ260台の機器を備え、使用する試薬や備品に関しては1000品目以上を用いています。然しながら、やはり最終的には人による細かな技術が要求される場合が多く、ミクロ

の手法を行ったり、データを讀んで臨床に報告したりと、一つの結果を出す前、目に見えない所での作業を黙々とこなしています。

そんな裏方なので殆どが検査室の中に籠っているように思われがちですが、近年ではチーム医療のもと各臨床科へ診療補助をすることも多くなってきました。最近では新たに新生児聴覚スクリーニングや神経系の術中モニタリングなどを開始、以前より行ってきた生殖医療への従事や糖尿病チームへの参画等も、医師・看護師・他の医療技術職と協力し合いながら実践しています。とは言え本来の業務も年々件数が増加し、生化学・CBCは其々月12000検体強(生化学テスト数では20万件余)、心電図検査は月4000件強、

細胞診検査は月1000件、輸血検査件数も県内では山口大学病院に次ぐ件数を実施しています。

学術研修も積極的に行っており、毎年各種関連学会への発表や研修会への参加、部内での勉強会も開催しています。個人でも技師の学会だけでなく専門学会へ所属しスキルアップを図っています。

近年世代交代が進み若手も増えてきましたが、知識や技術の継承を行いながら今後も信頼性のある結果を臨床へ報告することを第一に考え、他部署との連携を深め医療スタッフとして尽力していきたいと思っております。

検査部技師長 三浦みどり

